

妻沼町の庚申塔



妻沼町指定文化財
西城長慶寺の僧形庚申塔

妻沼町の庚申塔



妻沼町誌編さん中の著者

庚申塔集録の賦

枯草を払い庚申塔写す
春残し独り走らす踏査の眼
春光や青面金剛合掌す
鵬斎の書に魅せられし春日中

奈良原春風



葛和田大竜寺門前の亀田鵬斎書の庚申塔

序

妻沼町では、目下奈良原室長が熱意と蘊蓄^{うんそく}を傾けて、「妻沼町誌」を執筆編さん中であるが、このほど森田栄三郎町誌編さん委員より、文化財保護委員会に、一金五万円也の篤志寄付をされた。室長の発案で、この金を基金として「妻沼町の庚申塔」という冊子を発行して、森田委員の御好意に応ようということから本誌刊行のはこびとなったことは、文化財保護委員長としての職責にある私としては、まことに喜びに堪えない。

奈良原室長は、すでに「妻沼町所在の指定文化財」「県指定文化財妻沼聖天堂屋根替工事報告書」「妻沼町の板碑」「妻沼町風物史話」等執筆編さんした実績の持主であり、努力家である。もちろんこの集録も、妻沼町誌編さんのための調査の一環をなすものであるが、単独でカメラ、スケール、筆記具を携えて踏査したものである。

私たちの祖先が残した文化遺産は大切にしなければならないが、そのものを理解しなければ大切にするという意識は育たない。その意味において、今回刊行される「妻沼町の庚申塔」は、妻沼町内における民間信仰の動向を知る手がかりともなり、また、庚申造塔供養の推移を知る上にも貴重なものと思われる。ともすれば、経済の高度成長にもなう物質文明の進歩によって、最も人生に大切な精神文化の面が軽視される風潮を生み、社会に好ましくない傾向が現われているのは遺憾とするところである。「原点にかえれ」とは、物質文明を旧態にもどせというのではない。ものの考え方を基本的なものにおいて、あやまりのない進路を探究せよというのであろう。過去の歴史事象や文化財の本質を知るといふことは大切なことで、石造文化財第二編ともいふべき本誌は、その意味においても貴重であり、一読をおすすめして序にかえる次第である。

昭和五十年三月吉日

妻沼町文化財保護委員長 宮 島 俊 定

妻沼町の庚申塔目次

題 字	田 中 広太郎	1
口 絵	亀田鵬斎書の庚申塔	1
序	宮 島 俊 定	1
総 説		1
二基一体の庚申塔		3
僧形四手の庚申塔		4
青面金剛主尊の庚申塔		5
青面金剛主尊の庚申塔一覽表		8
種子を付した庚申塔		9
亀田鵬斎書の庚申塔		12
文字庚申塔一覽表		13
青面金剛の文字庚申塔		18
種子の庚申塔		20
編集後記		21

総 説

妻沼町の庚申塔には、きわめて古いものや珍奇なものはなく、土地柄にマッチした、きわめて平凡なものである。まず年代順（日本暦年は本文で記し、ここでは西暦をもつて記す）にみると、一六六〇年～一、一六六一年～一、一六六五年～一、一六八〇年～四、一六九一年～一、一六九六年～一、一六九七年～一、一六九八年～一、一七〇四年～一、一七〇八年～一、一七一四年～一、一七一五年～一、一七二四年～一、一七二六年～一、一七二九年～一、一七三八年～一、一七三九年～一、一七四〇年～四、一七四五年～一、一七四八年～一、一七五二年～一、一七五四年～一、一七五五年～一、一七五六年～一、一七五八年～一、一七六二年～一、一七六四年～二、一七六五年～二、一七六六年～一、一七六九年～一、一七七四年～一、一七七五年～一、一七七七年～二、一七七八年～一、一七七九年～二、一七八三年～一、一七八九年～一、一七九〇年～一、一七九二年～一、一七九五年～二、一七九七年～一、一八〇〇年～一三、一八〇一年～一、一八〇二年～一、一八〇五年～一、一八〇八年～一、一八二七年～一、一八二九年～一、一八三一年～一、一八三五年～一、一八三八年～一、一八四〇年～一、一八四四年～一、一八四五年～一、一八四八年～二、一八四九年～一、一八五〇年～一、一八五五年～一、一八六〇年～一九、一八六二年～一、一八六八年～一、一九二二年～一、一九二六年～一、一九三三年～一、一九五九年～二、一九六一年～一、年代不詳～五、以上百十四基である。右にみたように、一八六〇年（万延元年）十九基、一八〇〇年（寛政十二年）十三基と、各年一～二基の造塔に比してきわだたて多いのは、この両年は「庚申」の年によるものである。

次に、各字別の造塔数をみると、妻沼～一八、弥藤吾～五、男沼～七、台～四、出来島～三、間々田～二、小島～七、永井太田～一三、飯塚～四、八木田～四、道ヶ谷戸～二、上江袋～三、原井～二、市ノ坪～二、上根～三、江

波二、ハッロ三、善ヶ島六、上須戸三、西城四、田島三、西野一、葛和田七、日向二、大野二、
俵瀬二、以上で、弁財では一基も発見されなかった。あるいは見落しもあるかと思われるが、大体は集録し得
たものと思う。

庚申塔の詳細については、個々の庚申塔の項において述べるが、大別すると、二基一体のもの一、主尊が僧形のも
の一、笠塔婆形のもの一、主尊が青面金剛像のもの二一、このうち駒形後背のもの一五、舟形後背のもの六で、主尊
が邪魔をふまえているのが八基ある。像はいずれも六臂で、前手合掌体のもの一四基、その他は前手右に剣、左に索
を持っているが、ただ一基、右手にシヨケラ（赤児）を持ったものがある。

文字庚申塔も多様で、まず形状からみると、頂部山形に杵形を付したものの四、杵のないもの四、角形杵付のもの二
五、杵のないもの二四、自然石のもの一五、板石のもの一八である。更に文字を分類すると、「庚申」三（うち馬頭
観音種子あるもの三）「庚申塔」三二、「庚申供養」一〇（うち種子の付したものの七、日月を配したものの二）「庚申供
養塔」五（うち種子のあるもの一、日月を配したもの一）「青面金剛」三（うち日月を配したもの二）「青面金剛塔」
一（種子あり）「青面金剛塔碑」一、「大青面金剛」二（うち種子を付したもの一）「大青面金剛尊」一（種子・日月を
配す）「種子庚申」二（うち日月・三猿を付したもの一）

以上のように多種多様である。但し、種子は馬頭観音（ウーン）なので、庚申塔の範疇には入らないという説もあ
るが、一基には日月・三猿を付しているところから、庚申供養の目的で造塔したものであると解して本誌では、二基
とも庚申塔として取りあつかうことにした。以上妻沼町所在の庚申塔の総体的な概要を記したが、青面金剛の像形
は、陀羅尼集経の中にある、大青面金剛法の儀軌（ぎぎ）にもとづいたものといわれているが、妻沼町にある主尊を青面金剛
像にした二十一の庚申塔の中には、この儀軌とおりのものは一つもない。次に各個について述べることにする。

二基一体の庚申塔



飯塚字福王寺の安養院境内にある二基一体の庚申塔は、妻沼町に
所在する庚申塔では一番古く、造塔は万治三（一六六〇）庚子十二
月二十一日という紀年銘が彫られている。

左の塔は、舟形後背上部に日・月を浮彫りとし、中央に宝冠、け
さ衣を着け、前手合掌温顔の僧形である。後上手右に剣、左に三股
杵、後下手右に矢、左に弓を持っている。

その左右に猿を配し、足下に二鶏が向いあつて彫られ、塔身を受け
て蓮台・茄子座・台石がある。なかなか念のはいった造りである。

右の塔は、笠塔婆形につくられ、正面中央にとまり木を浮き彫り
とし、その上部に一鶏を、下方に一猿が木登りでもするように浮き
彫りされている。そして左面に種子と、奉供養庚申待志趣者造立×
××、施主十六人と彫られ、右の面に前述の紀年銘が彫られている

この右の塔と同じ笠塔婆形の庚申塔が、善ヶ島の竜泉寺境内にあ
る。造塔は寛文五（一六六五）乙巳十二月吉日とあり、塔の正面に
奉修庚申、その左右に紀年銘、その下に一猿、左右両面にもそれぞ
れ一猿が彫られている。総高一三五センチ、塔幅三一・五センチ。

僧形四手の庚申塔



西城の長慶寺領藥師堂の山門前通路左側にある庚申塔は、舟形後背の塔身上部に二鶏が向いあって彫られ、主尊は宝冠、けさ衣を着けた僧形で、前二手は印を結んでいる。後手右に棒、左に宝輪を持った主尊腰部左右に猿を配し、蓮台上に立っている。塔身七〇センチ、蓮台一五センチ、更にその下に一七センチの台石と、露出面一二センチの礎石がある。

主尊の頭上には、金剛界大日如来、左に馬頭観音、右に大黒天の種子が、その上部には弥陀の種子等が彫られ、後背右の面に、建立
庚申尊像二世安樂処、左に寛文元年初冬吉日願主敬白と彫られている。なお、この庚申塔は、西城村本郷十八戸の庚申講員が、本郷四つ辻道路脇に建立したものであるが、明治の初期、現在地に移したものである。

右のようにみてくると、この庚申塔は正しく仏教と習合したものであるし、さまざまな願いがこめられて造塔されたということがうかがえる。この庚申塔に限らず、以下掲出する庚申塔をつまびらかに見、検討を加えると、自然にその答えが得られるものと思う。なお、この庚申塔は、昭和三十四年四月十七日、妻沼町の文化財に指定されている。

青面金剛主尊の庚申塔

青面金剛尊は、陀羅尼集經の中にある大青面金剛法の儀軌にもとづいて造形されたものが正しいとされているが、その大青面金剛法の儀軌には次のように述べられている（音読）

「一身四手、左辺上手に三股叉を把る。右手に棒を把る。右辺上手掌に一輪を拈。下手に繯索を把る。其の身青色面大きく口を張る。狗牙上出。眼赤く血の如し、面に三眼有。頂に鬚髻を戴く。頭髮聳堅火焰色の如し。頂に大蛇を纏う。両膊各一竜倒懸有。竜頭相向かう。其の像腰に二大赤蛇を纏う。両脚腕上亦大赤蛇を纏う。把る所の棒上亦大蛇を纏う。虎皮勝縵。鬚髻嬰珞。像の両脚下各一鬼を安ず。」

以上の儀軌を見ると、石にこれる刻むのは至難であり、妻沼町内には、この儀軌にかなう庚申塔は一基もない。

上掲の写真は、大字日向の島田家（長井神社宮司）の墓地にある青面金剛を主尊とした庚申塔である。塔形は駒形後背、上部左右に瑞雲をとまなう日月を配し、後上手の右に宝輪、左に棒、後下手の右に矢、左に弓、前手右に剣左に繯、索を持ち、邪鬼をふんまえて立ち、下方に並んで三猿を彫り、その下に二鶏を配す。塔高一・〇五メートル、幅四〇センチメートル。造立は延宝八庚申年（一六八〇）十一月五日、町内で青面金剛を主尊としたのはこの年からである。





上掲の写真も青面金剛を主尊とした庚申塔で、大字台の円満寺門前に建立されているものである。
造立は延宝八年二月吉日となっているので、前者より九か月早い。主尊が邪鬼をふんまえていない点だけの違いでその他はまったく同じである。
像高七〇センチメートル、幅三四センチメートル。
台石は後に固定化するために付加したものであろう。
二鶏の下部が若干埋めこまれてしまったが、比較のととのった庚申塔である。



上掲の写真は、善ヶ島竜泉寺境内にある、青面金剛を主尊とした、駒形後背の、塔高八八センチ、幅四五センチ、宝永五年（一七〇八）十月吉日建立の庚申塔で、上部左右に瑞雲をともなう日月を配し、主尊の青面金剛は焰髪に鬘髻を戴き、前手を組み合せてシヨケラ（赤児）を持つ。後上手の左に宝輪、右に剣、後下手の左に弓、右に矢を持ち邪鬼をふんまえて立つ。主尊の足部左右に向き合って二鶏を配している。三猿は邪鬼の下にあるのだからが埋没していてわからない。



上掲の写真は、上江袋の薬師堂の境内にある、青面金剛を主尊とした舟形後背の、像高一・一メートル幅五〇センチ、元禄四年（一六九一）十一月九日建立の庚申塔である。

塔身の上部に瑞雲をともなう日月を配し、後上手左に宝輪、右に蛇の巻きついた剣、後下手の左に弓、右に矢を持ち、前手は合掌している。主尊の両側に二鶏を配し、足下に盤を置いてその下に三猿を彫っている。また、向って右側に「奉造立庚申供養」左に紀年銘、三猿の右に「江袋講中」とある。



下の写真は、大字田島慈眼寺墓地前にある青面金剛を主尊とした、駒形後背、塔高一・一六メートル、幅三九・五センチ、享保十一年（一七二六）二月吉日建立のものである。
上部左右に瑞雲をともなう日月を配し、前手合掌、後上手の左に宝輪、右に三股叉、後下手の左に弓、右に矢を持つ、主尊の両側に二鶏、足下に三猿を彫っている。以上特徴のあるものを記したが、次は表で紹介する。

青面金剛主尊の庚申塔一覽表（前掲を除く）

所在地	場所の名称	形状	塔身高cm	幅cm	造立年月日	西暦	備	考
葛和田	大竜寺境内	駒形後背	二五〇	五〇	延宝八・〇・吉日	一、六〇〇	一鬼・三猿・二鶏・前手欠損	
小島	医王寺境内	同	二〇〇		延宝八・二・吉日	一、六〇〇	一鬼・三猿・二鶏	
出来島	普門寺境内	舟形後背	二〇〇	四〇	元禄九・二・	一、六五〇	三猿・前手合掌	
大野	稲荷神社後	駒形後背	三〇〇	五〇	元禄二・〇・吉日	一、六七〇	一鬼・前手合掌	
永井太田	正蔵寺境内	舟形後背	八・五	七〇	元禄二・二・吉日	一、六八〇	三猿・前手合掌	
間々田	弘法寺境内	駒形後背	九四〇	四・五	宝永元・七・三	一、七〇四	三猿・二鶏・前手合掌	
葛和田	向野の辻	同	六・〇	五〇	正徳四・二・吉日	一、七四四	一鬼・三猿・前手合掌	
妻沼	摩多利神社	同	一四〇	四〇	正徳五・二・吉日	一、七五五	三猿・前手合掌	
小島	医王寺境内	同	二二〇	四〇	享保九・	一、七五五	一鬼・三猿・二鶏	
永井太田	籠原県道側	同	六・〇	五〇	享保三・二・四	一、七五五	二猿・二鶏・前手合掌	
原井	大師堂入口	角背舟形	五〇	二・五	宝暦五・乙亥天	一、七五五	三猿	
八ッ口	日枝神社前	舟形後背	三・五	五〇	寛政七・三・吉日	一、七五五	〃	
上江袋	溜井畔道東	駒形後背	九〇	四〇	不詳	一、七五五	一鬼・三猿・二鶏・前手合掌	
西野	共同墓地前	舟形後背	一〇・五	四〇	不詳	一、七五五	三猿・二鶏・前手合掌	
葛和田	神明社境内	同	六・〇	四〇	不詳	一、七五五	一鬼・三猿・二鶏・前手合掌	

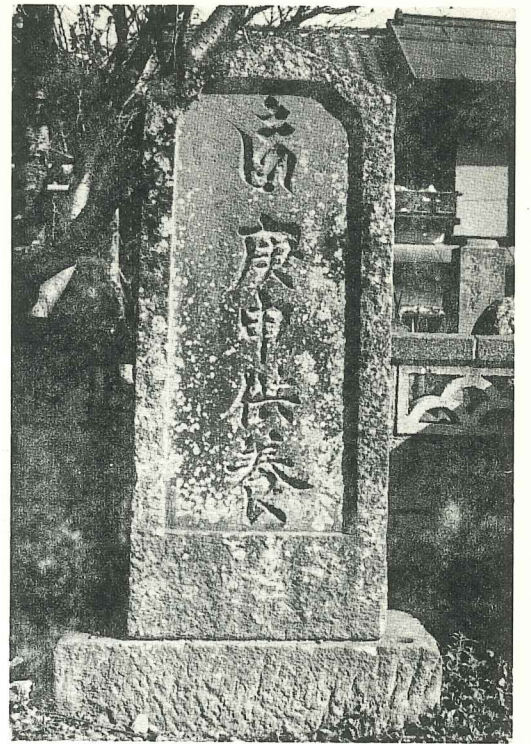
種子を付した文字庚申塔

ウーシンの種子は、馬頭観音・阿閼如来の種子などに用いられているが、愛染明王の通種子にも用いられている。しかし庚申塔にあるこの種子は、馬頭観音の種子として用いられたものと思われる。なぜならば、道教の三尸説が日本に受け入れられたのは、奈良時代から平安時代のことであるといわれているが、講をつくつての庚申待や、庚申供養の造立が盛んになる江戸時代までには、さまざまな信仰形態と習合して、信仰の骨子までが多岐にわたっていたものと思われる。今でこそ、寺院やお堂の境内にほとんど集められているが、かつてはその大部分が道辻に造営され、従つて道しるべをかねていたものである。庶民の願いもまた多種多様で、さまざまな信仰と習合したからといって、その価値が失なわれるものではない。馬頭観音との習合は、豊作を祈念する庚申講の結果なのであろう。



上掲の写真は上根の薬師堂境内に現存するが、明治の初期までは「エノキ」の太木があった。上根の、本郷・出口・西浦とがまじわる三叉路（さんざろ）にあったのである。塔は自然石で、高さ一・〇六メートル、中央に馬頭観音の種子、庚申供養と見事な文字を刻み、その左右に元文五庚申天十一月吉日、外側に、右くまかや道、左行田みち、上根村講中と彫られている。

元文五年は、西暦一、七四〇年で、妻沼町内では、文字庚申造塔初期のものである。



上掲の写真は、男沼長勝寺の門前にある庚申塔であるが、頂部山形、高さ一・二八メートル、幅五三センチ、外枠を付した立派なもので、台石上に建立されている。

種子 庚申供養という文字も、彫りもよい。外側に元文五庚申十二月吉日とあり、前者より一か月後の建立のものであるが、当時は、像形庚申が文字庚申となった初期のものだけになかなかみごたえがある。

なお、同門前には、このほか五基あり、その中にはつぎに紹介するように、鵬斎書の庚申塔もあり、文字はいずれも立派である。

○…江波神社前の参道辻にある庚申塔は、頂部を山形とし、外枠を付して浅く彫り込み、その中に、瑞雲をとまなう日月を配し、種子、庚申供養塔と彫られ、外側に宝暦二壬申天（一七五二）塔には彫られていないが、便宜上西暦年を付す。以下同じ）暢月吉日という紀年銘がある。塔高一メートル、幅四四・五センチ、厚さ二九センチ。

○…永井太田字上平、正蔵寺にある。頭部はなだらかに丸く、背部は舟形、正面に枠を付して浅く彫り込みを入れ、その中に種子、庚申供養、左右に宝暦四甲戌天（一七五四）正月吉日、施主上平講中と彫られている。下部は埋没され、現高八〇センチ、幅四五センチの庚申塔である。

○…弥藤吾字氷川、氷川神社前方の辻に建立されている庚申塔は、高さ八五・五センチ、幅三七・五センチ、厚さ二

〇センチ、外枠を付し、種子、庚申供養と中央に彫られ、その左右に、明和三丙戌（一七六六）三月吉日という紀年銘が彫られている。なお、この辻には「道祖神」という立派な板石碑が建立されている。

○…飯塚部落を過ぎて深谷道を西に進むこと百メートル足らずの北側に、盛土をした上に建立されている庚申塔は、高さ一・〇メートル、幅四八センチ、厚さ三三センチ、外枠を付して浅く切り込み、その頂部は山形となっている。安永六丁酉年（一七七七）霜月吉辰と彫られ、中央に種子 庚申供養とある。

○…妻沼駅入口となっている右側にある庚申塔は、下部がコンクリートづけになって大分埋没されているが高さ六二センチ、幅三一センチ、厚さ二〇センチ、外枠を付してその中に、種子 庚申供養、その左右に、寛政元酉年（一七八九）霜月吉日、弥藤吾下宿中と彫られている。



○…永井太田北廓の庚申塔（上の写真）は、高さ一・五八メートル、厚さ一六センチの板石碑形で、種子と庚申と彫られ、水雲書、当村北廓中とある。建立は万延元年（一八六〇）庚申臘月吉日。

○…男沼長勝寺門前の庚申塔は、高さ五七センチ、幅三一センチ、厚さ二六センチ。種子と庚申とだけ正面に彫り、万延元庚申歳十月十有六日と側面にある。

○…上小島の辻に、御岳塚が築かれているが、その中に建立されている庚申塔は、高さ一・二メートル。厚さ八センチの板石碑形で、釈真栄の書いた種子と、庚申と彫られている。万延元年十月十六日の建立。

亀田鵬斎書の庚申塔

「亀田鵬斎名は興、字は種龍、通称又左衛門という。別に善身堂と号す。江戸の人なり。初め井上金峨の門に入りて学を修め、後、一家を成し時に鳴る。晩年詩書酒画を楽しみとし、意に任せて放遊す。世人争ってその書画を求む文政九年（一八二六）三月七日歿す。年七三」と、書画人名帳にある鵬斎は、葛和田の荒川家（漢法医）にしばらく寓居していたことがあり、そんな関係から、町内において鵬斎の書跡を散見することができるが、口絵に掲出した庚申塔は、鵬斎の書いたもので、葛和田の大竜寺門前の不動堂の塚下に建っている。塔身の高さ八〇センチ、幅三四・五センチの角形で、正面に楷書で「庚申塔」と書き、その左に鵬斎興拜書と署名している。そして右の面には、寛政十



二年庚申三月吉日 東 ぎやうだ、わたしは道、左の面に、南くまがや、西、めぬま、ほんじゃう道と記され、道しるべを兼ねたもので、台石の正面には「講中」と書き、左右側面に講人の名がきちんと列記されている。また、鵬斎の書いた庚申塔（上の写真）は男沼の長勝寺にもあるが、これは書いてもらってからしばらくたった万延元年（一八六〇）十月十六日に建立している。なお、葛和田向野の辻にも、文化十五年（一八一八）建立の高さ七二・五センチ、幅三九センチ、厚さ三八・五センチの庚申塔がある。

文字庚申塔一覧表（別掲の分を除く）

所在地	場所の名称	形状	高さcm	幅cm	造塔年月日	西暦	備考
道ヶ谷戸	宝珠院境内	角形棹付	七〇・〇	三〇・〇	元文三・九・二	一七六六	奉納庚申供養
永井太田	まないたの辻	同	六〇・〇	三〇・〇	元文四・己未歳	一七六九	日月・庚申供養・三猿
市ノ坪	籠原県道西側	頂部山形	七〇・〇	三〇・〇	元文五・一〇・吉日	一七四〇	日月・庚申供養塔
台中島	共同墓地内	角形棹付	八〇・〇	三〇・〇	元文五・一〇・吉日	一七四〇	庚申供養塔
八木田	観音寺境内	同	六〇・〇	二五・〇	寛延元辰・一〇・吉日	一七六八	同
妻沼若宮	若宮廊入口辻	頂部山形	七三・〇	三・五	宝暦八・二・吉日	一七五九	庚申供養・棹付
飯塚	古江原道路側	自然石	五〇・〇	三〇・〇	明和二・三・吉日	一七五五	庚申供養
大野	稲荷神社裏	角形	五〇・〇	三〇・〇	明和六・己丑	一七六九	庚申塔・下埋没
妻沼東岡	新旧県道の辻	角形棹付	八三・〇	四〇・〇	安永戊戌七戌季孟冬吉日	一七八六	庚申塔（写真掲出）
妻沼中岡	玉洞院境内	同	八〇・〇	元〇・〇	安永八己亥年中春吉日	一七八九	同
同	瑞林寺西方辻	同	七〇・〇	三〇・四	安永八・四・吉日	一七八九	同
妻沼本町	大我井神社前	自然石	六〇・〇	三〇・〇	天明三・二・吉日	一七八三	同（写真掲出）
妻沼大塚	摩多利神社前	角形棹付	五〇・〇	二六・〇	寛政二・二・吉日	一七八〇	同
小島	医王寺墓地内	同	六〇・〇	四〇・〇	寛政四・二・吉日	一七八三	庚申
台	円満寺門前	自然石	一〇〇・〇	五〇・〇	寛政七・三・吉日	一七八五	同

上須戸	旧道妻沼線辻	頂部山形	一八・〇	四・五	寛政九丁巳年	一七九	庚申塔・三猿(写真掲出)
弥藤吾	杉之道の辻	角形	八・五	三・〇	同三・二・七	一八〇	庚申・杉之堂とある
出来島	普門寺境内	角形棒付	三・〇	五・〇	同	同	庚申
男沼	長勝寺門前	自然石	八・〇	三・〇	同	同	庚申塔
同	同	角形	六・〇	三・〇	同	同	庚申塔
原井	大師堂入口	同	六・五	七・六	同	同	同
江波	宝蔵院境内	同	六・五	三・三	同	同	庚申
道ヶ谷戸	飯塚境道路脇	同	六・〇	二・〇	同	同	庚申塔
永井太田	消防器具置場	角形棒付	八・〇	四・六	同	同	同
同	正蔵寺境内	自然石	七・〇		同	同	庚申
間々田	弘法寺境内	同	八・〇		同	同	同
善ヶ島	竜泉寺境内	同	一〇・〇		同	同	同
田島	慈眼寺基地前	角形	五・五	二・八	文化七・	一八〇	庚申塔
西城森谷	青木武雄宅東	頂部山形	九・三	三・三	文化九・	一八三	同
妻沼大塚	摩多利神社前	角形	八・〇	三・〇	文化三・〇・吉日	一八五	同
男沼	長勝寺門前	同	七・〇	三・〇	文政二・	一八七	庚申供養
田島	慈眼寺基地前	同	五・〇	二・六	文政三・三・吉日	一八八	庚申塔
妻沼東岡	新旧県道辻	板石碑	二九・〇	天保二・	同	一八三	庚申・碑の厚さ二〇センチ
八木田	芝薬師堂境内	角形	四・〇	三・〇	天保六・	一八五	庚申・下部埋没

妻沼	不動堂裏の辻	同	六・〇	三・五	天保九・〇・	一八三	庚申
妻沼若宮	若宮八幡境内	板石碑			天保二・	一八四	同
上根	薬師堂境内	角形	七・〇	二・〇	天保五・〇・吉日	一八四	庚申塔
小島	医王寺墓地内	自然石	三・〇		弘化二・二・吉日	一八五	庚申
日向	島田神官屋敷	板石碑	二〇・〇		弘化五・	一八六	庚申塔・島田密庵の書
俵瀬	成就院境内	同	九・〇		同	同	庚申塔・碑の厚さ一一センチ
妻沼寺内	四つ辻	角形棒付	四・〇	七・〇	嘉永二・九・吉日	一八六	庚申
八木田	芝の東辻	同	三・〇	元・五	嘉永三・一・吉日	一八五	庚申塔
市ノ坪	無量寺入口	角形	七・〇	三・〇	安政二・九・吉日	一八五	同
永井太田	観音堂境内	板石碑	四・〇		安政七・二・吉日	一八六	庚申・大竹輜の書
出来島	普門寺東道脇	同	一四・〇		万延元・	一八六	庚申・道本の書
永井太田	正蔵寺境内	同	八・〇		同	同	庚申
善ヶ島	大野入口の辻	同	八・〇		同	同	同・左肩欠損
西城森谷	青木武雄宅東	頂部山形	六・〇	二・六	同	同	庚申塔
台	円満寺門前	板石碑	一〇・〇		同	同	庚申
永井太田	籠原県道東側	同	五・〇		同	同	庚申塔
小島	医王寺墓地内	同	三・〇		同	同	庚申
八ッ口	日枝神社前	角形	七・〇	二・五	同	同	庚申塔
妻沼大塚	摩多利神社前	角形棒付	六・〇	三・五	万延元年	同	庚申

小島	善ヶ島	上根	上須戸	妻沼	弥藤吾	上江袋	上須戸	永井太田	同	葛和田	男沼	妻沼	八木田	妻沼
医王寺墓地内	竜泉寺境内	大性寺境内	西光院境内	白髪神社境内	新田東部の辻	薬師堂境内	地藏堂前の辻	籠原県道東側	同	大竜寺境内	長勝寺門前	花蔵院墓地内	中の辻	聖天山境内
自然石	角形	同	板石碑	角形枠付	角形	板石碑	角形	板石碑	同	角形	自然石	同	同	角形
六・〇	六・〇	五・〇	六・〇	五・〇	七・〇	七・〇	七・〇	七・〇	六・五	五・〇	三・〇	五・〇	三・〇	一〇・〇
六・〇	三・五	三・五	二・五	二・五	二・五	二・〇	二・〇	二・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	四・〇
同	同	同	安政七・三	万延元・三	文久二・二・吉日	明治元・二・四	明治四・九・吉日	大正五・四・一	昭和七・二・六	昭和四・三・吉日	昭和四・三・吉日	昭和四・三・吉日	昭和四・九・吉日	年代不記
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同・積真栄の書	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

以上妻沼町に所在する文字庚申塔を表にして紹介したが、備考欄は主として書かれている文字を記した。次に、右の中の代表的なものの四基の写真を掲出するので、これを勘案し、表の説明不足を補っていただきたい。



④ 妻沼字東岡新旧県道の辻



⑦ 上須戸旧道妻沼線の辻



④ 妻沼大我井神社前の辻



⑦ 妻沼字大塚摩多利神社前

青面金剛の文字庚申塔



上掲の写真は、弥藤吾字中口の道路脇にある庚申塔であるが、頂部山形に外枠を付し、馬頭観音の種子を上部に、大青面金剛と彫っている。高さ九九センチ、幅三二センチ、厚さ二〇センチのものである。

造立は、延享二年（一七五六）十二月、このように、青面金剛という文字を彫った庚申塔が散見されるので、以下紹介する。

○：葛和田大竜寺の門前に、正面を枠形に浅く彫り込み、その中の上部に瑞雲をともなう日月を配し「青面金剛」と彫っている。高さ九七・五センチ、幅四五・五センチ、造立宝暦六年（一七五六）二月の庚申塔がある。

○：俵瀬の成就院境内にある庚申塔は、頭部のかどを若干まるめ、外枠を付し、その中の上部に瑞雲をともなう日月を配し、馬頭観音の種子と青面金剛と彫り、その下部に三猿を彫っている。高さ七七センチ、幅三〇センチ、厚さ一五センチ、彫はさほど深くないが、なかなか美事な文字である。

○：飯塚と、道ヶ谷戸境の道路脇に、高さ九五センチ、幅三八センチ、厚さ二三・五センチの庚申塔がある。形状は角形で、外枠を付し、その中に「大青面金剛」と彫られている。紀年銘は明和二乙酉季十月吉日とあるので西暦では、一七六五年である。



西城の長慶寺付属の薬師堂門前にある庚申塔（上部掲出の写真）は、角形の石に、頂部を山形にした外枠を浅く彫り込み、その上部に瑞雲をともなう日月を配し、馬頭観音の種子と青面金剛尊と彫っている。

塔身枠外の下部に三猿を彫り、なかなか手のこんだ彫りである。高さ九四・七センチ、幅三八センチ、明和元甲申歳十一月吉旦という紀年銘がある。

○：善ヶ島竜泉寺の境内にある庚申塔には、篆書で「青面金剛塔碑」とあり、その右に安永三年甲午春三月、左に、善嶋邑講中とある。高さ八三センチ、方三一センチの角柱形で、中心部が若干尖ったようになっている。この庚申塔も、道しるべとなっているところから、村の道辻に建てられていたものであろう。

○：妻沼字若宮廓の入口辻に建立されている庚申塔は、上部かどをややまるめ、外枠を付した、高さ八六センチ、幅三六・七センチ、厚さ一八センチのもので、馬頭観音の種子と、青面金剛塔と彫られている。造立は安永六年（一七七七）ということが紀年銘によって知ることができる。永井太田字前新田にある籠原／間々田間の県道東側に、数基の庚申塔が建っているが、その中に、高さ四七センチ、幅二一・五センチ、厚さ一三・五センチという小さな角形の石に、「青面塔」と彫られているものがある。造立寛政十二年十一月で、この年は庚申の年にあたり、総説の章ですでにふれたように、妻沼町内では、万延元年の十九基について二番目の、十三基が造営されている。

種子の庚申塔

妻沼字一本木の阿弥陀堂に、馬頭観音の種子を高さ九五センチ、幅八五センチの自然石いっばいに深く彫り込んだ。見るからにどっしりとした庚申塔（庚申塔の範疇に入らないとする説もある）である。造立は明和元年（一七六四）十一月、道しをべをかね、右、古戸みち、左り、本庄ミちと記されたい。造営は梶山・一本木・川岸講中である。（下の写真）



上掲の写真は、八ツ口の日枝神社境内にある庚申塔であるが、高さ八七センチ、幅三一センチ、厚さ二〇センチの角形、表面に外枠を浅く彫りこみ、その中に、瑞雲をとまなう日月を配し、中央に大きく馬頭観音の種子を彫り、枠外下に三猿を千鳥形に配している。造塔は、安永四年（一七七五）十一月
種子庚申塔は以上二つであるが、二つとも「美事」といえる造りである。

編集後記

森田先生より、篤志の御寄付を頂戴した感激から、これを有効に使わせていただくために、相当額の出費を覚悟の上で、「妻沼町の庚申塔」という冊子を発行してはと提案し、文化財保護委員長の了解を得たので、執筆・編集にとりかかった。すでに基礎調査を完了していたので、さほどの苦勞もなくまとめあげることができた。

現代人の感覚をもって評価すれば、庚申塔の造塔供養など、おろかな庶民の、見戯にひとしい行為かも知れない。だが、その時代の世の中の仕組、法度（はつと）にしばられて生活していた庶民の実態を思いあわせれば、一笑にふすわけにはいくまい。庚申塔に限らず、すべての石造文化財には、当時の庶民の素朴な願いがこめられているのである。そしてこれは、遊行僧の教化の具現であり、従って造立された庚申塔の中には仏教と習合したものもあり、青面金剛を主尊としたものであっても、大青面金剛法の儀軌にもづいて造形されたものは見あたらぬ。持ちものは儀軌通りのものが多いが、儀軌では四手と定めているのに対し、二手加えて六臂像とした。このため二手は合掌しているか弓矢を持っている。また、石に刻む尊像であって見れば、儀軌に定めたようなこまかい細工を施すことは至難である儀軌にかなっていないからといって、信仰心の深浅をとやかくいってもはじまるまい。その当時の人々は、これを是とし、乏しい財布の中から金を出しあって、庚申講を実施していることのあかし、ないしは記念碑として建てたのである。特に感じられることは、ほとんどの庚申塔が村々の辻に建立され、道しるべをかねており、地理不案内の旅人にとっては、行先を知らせてくれるありがたい存在で、思わず手を合せたであろうということである。とにかく、妻沼町所在の庚申塔を、思いがけなく集録して刊行するのはこびとなったことは嬉しいことである。

昭和五十年三月吉日

妻沼町誌編さん室長 奈良原 春 作

妻沼町の庚申塔

昭和五〇年五月十五日 印刷

昭和五〇年五月二十日 発行

執筆編集 奈良原 春 作

発行者 妻沼町文化財保護委員会
埼玉県大里郡妻沼町

印刷者 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町